

シリーズ・編集部座談会《こんな話&あんな話》

業界の現況・企業の状況を《データ》で読み解く方法について考える①

【出席者＝本紙編集部一同】

☆データを解析・分析・応用するには連携が有効！

司会者 今回の座談会は「データの読み方」をテーマにやっていきたいと思います。ICT（情報通信技術）などの進化によって、現在、我々が得られるデータ量は膨大化の一途をたどっているよね。我々はいわゆるビッグデータの時代の渦中にあるわけだ。

それだけに対処の仕方を誤れば、データの洪水に流されたり、間違った方向に連れて行かれたりしかねない。逆にデータの選択と分析がハマれば、大きな利益を得ることも可能だ。だからこそ、現代においてはデータの読み方というのが、非常に重要になってくる。

記者C 読み方を間違えたり、ぜんぜん別の方向に連れて行かれたりするぐらいだったら、データなんて気にしないほうがいいという考え方も、一方では成り立つかもしれません（笑）。

記者A あ、それはいえるね。だけど、それをいっちゃあ、オシマイという感じもする（笑）。

記者B だけどデータの読み方のコツというのは確かにあるんだろうね。例えば医療検査のデータの読み方なんて、その定型的な例ではないかな。

記者C そうだね。医療検査の場合、データの読み方を間違えれば、生命にもかかわってくるから、重要だよな。

司会者 よく人間ドックで何十年間も続けて検査してきたのに、ある日突然、とんでもなく肥大したガンが発見された、なんて人の例を聞いたりする。あれはそういうデータが、検査しても出てこなかったということじゃなく、読めなかったということだろうね。

要するに、そのデータを読む検査技師や医者の方量がなかったということ。その力量の差が、データをどのように読み解いて、それを治療にどう生かすのかというような部分で、結果に大きな差を出してしまうこ

とになる。

記者A 誰が見ても「異常」がわかるデータなら分析するまでもないわけですけどね。

一見「異常なし」のデータであっても、周辺のデータと突き合わせて読むと、別の意味が出てくることがあるということなのでしょうね。問題は検査技師や医者が、そのことに気づいて、正しい方向に展開できるかどうかということにかかってくる。

それはビジネス上のデータについても、同じことがいえるような気がします。

記者C そうだね。だからこそ近年、能力の高いデータサイエンティスト（データ解析者）の重要性が盛んにいわれている。そして、データサイエンティストの全国組織ができて、資格も生まれて、人材養成もなされるような流れになってきている。

でも、その結果として、じゃあデータを正しく解析できる人がものすごく増えているのかというと、必ずしもそうはいえないのではないかな。

記者B 資格を取ったからとか、専門的な勉強をしたからといって、正しい解析ができるわけじゃないことは、さっきの医療検査技師の事例が物語っているよね。あの人たちだってみんな、国家資格を持っているわけだから。最終的にはその人のパーソナリティとか能力の問題になってくる。

司会者 それはある。例えばお医者さんでいえば、患者の症状をみたり話を聴いたりしながら、いわゆる診立て（病名の見当をつける）をするわけだけど、診立てが上手になるのは、通常はやっぱり、かなりトシをとってからみたいだね。

もちろん若くして、診立ての上手な医者もいるわけだけど、たいていは経験をたくさん積むことで、診立

ての能力も磨かれていくことが多いと聞くよね。

ただ、医者の世界においても、そういう能力と検査データを解析する能力とは必ずしも一致しない。検査データを読むのは、また別の能力とか勘が必要とされるようだ。

だから賢い医者の場合は、信頼できる検査技師の見解を率直に取り入れ、診断に活用するというような、柔軟性に優れているという話も聞く。

記者C なるほど、それは示唆的な事例ですね。つまり、その「優秀な検査技師と柔軟性と経験に富んだ医者との組み合わせ」は、ビジネスの現場においては、ビッグデータからの有効なデータの抽出・選択・解析などは、能力の高いデータサイエンティストに任せ、そこから導き出された結果を柔軟性と経験に富んだ経営者が会社の運営に生かしていく——という組み合わせに置き換えることができそうです。

記者A それはある意味、理想的な組み合わせだね。膨大なデータの解析・分析・応用には、個の能力だけでなく、連携が必要だということだ。

ただ、そうした「ビッグデータ」とまではいなくても、経営に関するいろいろな意味での指数は、例えば「財務諸表」などからも、ある程度読み取れるのではないですか？

司会者 うん。いいところに気づいたね。今回の座談会のテーマである「データの読み方」というのは、端的にはそういうことなんだ。

☆財務諸表は得意先の情報の宝庫

司会者 例えば、どういう企業が倒産しやすいのかという設問をしたとする。それについても、財務諸表をみれば、だいたいの傾向はいえるところがあるんだ。

具体的には倒産するような会社は、財務諸表的には債務超過になっている会社が多いということだね。

これはとくに建設関連業者のような、人をたくさん使う分野の仕事にイえることだけど、入ってくるお金よりも出ていくお金の多い局面がけっこうある。主に人件費だよな。

例えば中堅以下の規模の独立系電気工事会社の場合を例にとってみよう。仮にこれをX社とする。X社に

は仕事がいっぱいたくさんあると。そして、その状態で回転していくのは嬉しいことではあるんだけど、建設関連は労働集約型の業界だから、仕事をすればするほど使う人の数も多くなる。必然的に、労務を提供してくれる会社や技術者たちに、まずは決められた時期にお金を支払わなければいけない。

その場合、ゼネコンなんかから自社にお金が入ってくる前でも、とりあえず協力業者に支払わなければいけないわけだよな。当たり前の話だけども、それが積み重なるような形で、ゼネコンからの入金と協力業者への支払いの時期がズレ続けてしまうと、支払いのお金を捻出するために自分の資本を食っちゃうことになる。あるいは銀行などから借り入れして支払うということになる。それが積み重なっていくと、ボディブローのようになり、X社は非常に苦しくなる。

記者B なるほど。

司会者 例えば「黒字倒産」という言葉があるんだ。仕事があればあるほど、年間トータルの収支では黒字のはずなのに、今いった例のように、局面々々では赤字が積み重なってきて、ついには体力がもたなくなると。ついには「黒字のはずなのに倒産」なんてことになる。そんな例もあるということだ。

記者B そういう危険性のある会社というのは、ウチでやっている「データベース事業」のデータ資料の上でも、債務超過として出ているわけですね。

司会者 そうなんだ。要するに債権管理がきちんとできているかどうかということなんだけど、そのあたりは財務諸表をみれば、明確な数値として表れている。

記者A インターネット上では、不渡りを出した会社の情報などが出ていますが、このところ景況感はあまりよくないのにもかかわらず、電気工事業界には意外に倒産業者が少ないように思います。

記者C それは確かにそうだ。10年前に比べると倒産業者は半減しているんじゃないかな。

記者B それはその間に、倒産しそうな会社はみな倒産してしまい、現在は「淘汰された状態」になっているのかもしれない。

司会者 それはいえるね。今回はより具体的に、データの読み方を話し合ってみよう。(以下、次号に続く)